

学生時代よりありとあらゆる最新の医学情報がアメリカから来る事を知り、なぜこれほどにアメリカが世界の医療をリードしているのかを確かめたくなったのが留学を目指したきっかけでした。医学部3年の時からアメリカでの臨床研修資格である FMGEMS (Foreign Medical Graduate Examinations) に挑戦し、研修医1年目で pass したものの、アメリカに知り合いも全く無く研修病院を探すこともなくそのまま日本で研修医をはじめました。しかし、卒後5年目になってもアメリカ留学の夢が捨てきれず第一外科前教授の二村雄次先生になんとか留学できるようお願いしたところ、University of North Carolina at Charlotte の Dr. Mark G. Clemens のもとでリサーチをする機会をあたえていただきました。彼はもともと Johns Hopkins University, Department of Pediatric Surgery で Director をされていた方で、intravital microscopy (生体顕微鏡) を使った肝微小循環の研究で有名な方です。Dr. Clemens のもとでリサーチをはじめて約半年後の1999年1月に、私のいる大学で Ph.D. program がはじまりました。それに apply してみないかと言う話が舞い込んできました。この Ph.D. program は Department of Engineering, Biology, Chemistry, Physics が一体となった interdisciplinary program で、「この program は工学部と医学部を卒業した経歴を持つおまえにぴったりだから挑戦してみないか」と言われました。私はもともとアメリカで臨床をやりたいもの、Ph.D. を取得するなどということは考えた事ありませんでしたが、リサーチを行ううちにもっとこれを深く学びたいという気持ちも強くなっていました。また自分の能力では、当初の予定であった2年間のリサーチ経験では表面的なものだけしか習得できず中途半端なものに終わってしまうような気がしました。いろいろと悩みましたが、結局この Ph.D. program に apply することにしました。外科医にとって臨床修練を長期間休む事は非常に risky であるとは思ったのですが、この program を通じてそれに代え難いものを学ぶことができるのを期待しての一大決心でした。

さて、いざ Ph.D. program を始めてみると、予想以上に大変である事に驚かされました。Ph.D.を取得するには数多くの授業をうけ単位を修得するだけでなく、Engineering Department (工学部) や Chemistry Department (理学部、化学科) など分野が違う研究室で実験を行う、自分の実験結果をまとめて教官や他の生徒の前で発表する、National Institute of Health (NIH) の form にのっって full size の grant を書く、定期的に行われるセミナーに参加する、生物学部の学生に授業を教える、など山のような duty が課せられます。そして最後に自分の実験結果を卒業論文として1冊の本にまとめ(これを Dissertation といいます)、それについて全学部を対象に発表、審査員から質疑応答を受けるといふ step(これを Oral Defense といいます)を経て最終的に Ph.D.を取得するのにふさわしいかどうかをきびしく審査されます。アメリカの Ph.D.はこのような経験を通じて論文を読むこと、リサーチを planning する事、自分の結果を analyze すること、その結果を学会でうまく発表すること、paper や grant を書く

こと、を徹底的にたたきこまれます。私が特に感心したのは、このような教育方法が私の大学だけでなくアメリカ中のどの大学でも同じように行われ、Ph.D.を取得した人はどの大学を出ていようともリサーチを独立してやっていけるある一定以上の能力を満たすように教育されるという事です。

このようはかなり厳しい Ph.D. program でしたが、私はなるべく早く臨床の現場に戻りたいという気持ちが強かったため通常の2倍の量で授業をこなし、実験もかなり根を詰め、5編分の論文を盛り込んだ卒業論文を2001年の3月に書き終え、program をはじめて2年半後の2001年5月には Ph.D.取得のために必要な全ての requirement を満たし卒業する事ができました。Ph.D.を取得後にもととの念願であった臨床研修をするため University of Alabama at Birmingham, Department of Surgery, Center for Surgical Research に行きました。ここでは Dr. Mark G. Clemens の恩師でもある Dr. Irshad H. Chaudry のもとで post doctoral training をしながら resident のポジションを獲得するために頑張りました。しかし、なんと情けないことにも1年たらずで貯金が底をついてしまいました。Ph.D. student であった時には収入も非常に低く(毎月1200ドル程度でした)、日本で貯えていた貯金を常に食いつぶす赤字の生活をしていました事、留学中に3人目の子供が生まれ家族5人の所帯になってしまったこと(これは私の不徳のなせる業です)、Ph.D.は取得したものの、ポスドクとしての給料が予想以上に安かった事、などが原因でした。妻とも話し合いを重ねた結果、結局アメリカでの臨床研修はあきらめ、日本に帰国することにしました。そこで、二村前第一外科教授になんとか外科医として働く口を捜していただくようお願いしました。4年以上も大学にほとんど連絡もせず自分勝手なことをやっていたにもかかわらず、二村教授や医局長の小田先生が親身に私の就職先を捜してくださり、日本で外科医としてのトレーニングを再開する事ができました。帰国後は、遅れてしまった外科のトレーニングを続けるとともに、アメリカで学んだリサーチの素養を生かし、外科医としてできる臨床により近いリサーチを行えるよう日々努力しております。

外科医がアメリカで Ph.D.を取得することに、どんな意義があるのか?ある人は「外科医はメスが切れる事が最も重要で、基礎研究の知識など必要がない」と言われるかもしれません。しかしアメリカに渡って初めてリサーチ(基礎研究)という世界をのぞいてしまった私は、どうしてもそれを避けてその後の医学者の道を歩むことができないと思いました。Ph.D.プログラムを通じて基礎研究を学んだことは、現在臨床医学に携わる自分には、大きなメリットとなっていると信じてやみません。40歳であった私に、こんなわがままなことをさせてくれた家族や、第一外科の諸先生方には本当に感謝しています。今後は自分がアメリカで身につけたことを生かしてなんとか御恩返しができないかと思っています。